24

近代日本におけるコレラの伝播（三）

市川智生
横浜国立大学国際社会科学研究科

本報告では明治から大正期にかけて、神奈川県下でコレラがどのように伝播したのかを検討する。分析にあたっては、できうる限り詳細な統計データと地形・河川・交通などの地理データを連動させ、最終的には伝播を規定する要因がどのようなものであったのかに迫りたい。

周知の通りコレラやペストなどの急性伝染病は船舶の往来を通じて日本の各地方へともたらされた。この点では、東端に横浜港が位置する神奈川県は長崎や兵庫と並んで、国内での伝播の基軸としての機能を果していたといえよう。近代日本のコレラ史研究では、「伝播」といった場合にはこのような港湾都市間での病原菌の移動を意味していた。たとえば、山本俊一氏の大著『日本コレラ史』や厚生省公衆衛生局『検疫制度百年史』でも海外からのコレラの輸入と海港検疫について多くの紙幅が費やされている。しかし、コレラが流入する契機にかんしては一定の研究蓄積がある中で、内陸部に罹患者が発生したのちの伝播経路についてはこれまでほとんど言及されてこなかった。横浜に上陸または発生したコレラが関東各地へと拡散していったと仮定すると、神奈川県域における伝播パターンを解明することは近代日本のコレラ流行史にとって極めて重要な課題であるといわねばならない。

明治期以降の神奈川県における主なコレラの流行を罹患数でみると次の通りである。一八七七（明治一〇）年＝一一四八人、一八七九（同一二）年＝二一二〇人、一八八二（同一五）年＝三七八五人、一八八六（同一九）年＝五八九九人、一八九〇（同二三）年＝三一八一人、一八九五（同二八）年＝八三五人となっている。罹患者の過半は横浜区（市）でのものであったが、津久井郡や足柄下郡など比較的遠隔の地域にも伝播していたことは注目に値しよう。なかでも一八八二年と一八八六年の流行は横浜区内での罹患者が関東各地、さ

らには国内全域へと伝播したものであった。

上記のような規模の大きなコレラの流行の後には神奈川県衛生課（のち警察部衛生課）によって防疫の報告書が編纂されるのが通例であった。報告者は『明治十八年虎列刺病流行紀事』、『明治十九年虎列刺病流行紀事』、『明治二十三年虎列刺病流行紀事』、『大正五年虎列刺病流行誌』の計四点を確認している。この流行紀事（誌）は当局の法令や防疫施設、経費にかんする情報が詳細に叙述されていて興味が尽きない。さらに統計にかんする部分では一日ごと・町村別で罹患・死亡の結果が掲載されており、本報告ではこれを基礎データとして使用する。さらに各年の流行の伝播パターンにおいてどのような変化がみられるのかを視覚的に明らかにするために、GIS（地理情報システム）と数値データを連動させて分析を行う。

なお、慶應義塾大学の「暦象オーサリング」プロジェクトでは上述の『流行記事（紀事）』、『流行史（誌）』の編纂を一一九点まで確認し、そのうち一〇四点を収集した。同資料を疾病別にみるとコレラ五七、赤痢四二、ペスト一二、その他八というものである。鈴木、永島、市川による一連の報告は流行紀事（誌）の最大の特色である統計部分を本格的に利用した最初の研究となることを付記しておく。